

Main Text (The essay must be 1 page in English or Japanese)

Essay Title: ピンチとチャンスは手のひらの裏表ーアフターコロナの時を見据えて

Topic Num.:

ピンチとチャンスは裏表

今回、このコロナ危機と2度目の研究者採用が偶然重なった。前任校の任期が満了する時期とちょうど重なり、職がつながったと胸を撫でおろしていた矢先のコロナ危機である。私の専門は観光学である。コロナ禍の中で観光業界は日に日に景気が悪くなったため、私の周囲の社会情勢は厳しい雰囲気になってきた。しかし、それまでの前任校でも、地震での被災など危機のたびに、学生たちに「良いことと悪いこと、ピンチとチャンスは必ず手のひらの裏表の関係にある。良いことだけ、悪いことだけで物事が存在できるわけではない。プラスのものの負の側面、マイナスのものの正の側面を見落とさないようにすることが社会科学では重要だ」と教えてきたし、私自身もそれに従って生きてきた。今回のコロナ禍でも、「今こそチャンスだ」とすぐに気持ちを切り替え、『AI や自動運転を用いた、コロナ禍の時代における新観光のあり方』などをテーマに、4月の着任以降、直ちに複数の財団や公的団体、民間企業などに研究助成や研究協力の応募、打診をしている。

『今はアイデアの試しどき』

昨今の社会情勢で、数多のレストランがランチタイムに弁当を売っているが、多くの店が弁当などを売り始めるよりも一歩先に、ランチボックスを売り始めた近所の料理店の店主が、販売初日にしきりに言っていた売り文句がこの言葉である。私自身この言葉を聞いて「なるほどもともとだ」と感心したと同時に、もう少し考えてみると、自分のような学術分野の人間でも、「今なら新しいアイデアを試しても大きな損失にはならない」、ということに気が付いた。仮にアイデアが失敗であったところで、平時なら大きな時間的ロスになるが、今はほとんどの物事が止まっている。上手くいったときのプラスは平時より大きく、失敗したときのマイナスは平時より少ない。これは物事の試しどき、あるいは新しいことの初めどきである。失敗なら元に戻せばよいだけである、止まっているのは世の中のほうなのだから。

サンクコスト効果と正常性バイアスに気をつける

そうすると、気をつけなければならないのは、サンクコスト効果と正常性バイアスの二つである。

ある程度試したアイデアがダメならダメで、それで得た知見や経験は身につけたり記録につけて残しつつ、離れる決断をしないといけない。今なら手を引いてもそんなに大きな損失にはならない。上述の料理人の通り、「今こそアイデアの試しどき」であり、離れてもロス是非常に少ない。ただし、知見としては残しておかないといけない、いつだって新たなアイデアは失敗から生まれるのだから。今はトライアンドエラーを多く行い、多くの経験を積んで、今後に備えておく時期だと考えている。

一方で、身体的あるいは経済的に大きなリスクが迫ってきた場合、またはその可能性がある場合には、ただちに手を引く決断をしないといけない場合もあると考えている。そうしないと、「今は大丈夫、おそらく大丈夫」という、正常性バイアスの罠におちいり、気が付いた時には手遅れになっているということは、過去に何度か実例を見ているがよくあることだ。

様々なタイプの仲間と手を組む

チャンスを活かす、アイデアを試す、そのためにも、同じ専門分野の研究者との人間関係はもちろん、普段から、他分野、文系理系融合系を問わず、様々な研究者とかかわっておくべきであると信じている。加えて、異業種異分野の方々、在野研究者の方々、あるいはその道のマニアやオタクの人々とも、つながりを持っておくべきと考えている。実際、今回このコロナ禍で新たに手を付けている研究テーマのうちの一つは、疫病災害時の社会変容と観光の今後の変容を歴史資料に基づいて分析し予測するというもので、これは当初、このようなことはできないか、と関連分野のマニアから相談を受けたテーマであった。これは学術的に取り組む価値があるというので、すぐに歴史学者と生物化学者に連絡を取り、研究チームを発足させた。

今は決算の時でもある

危機の時は、チャンスを活かし、アイデアを試す機会であると同時に、今までの経験などの棚おろし、いわば決算の時期でもある。私自身、IEEE に加入するきっかけとなったのが、東日本大震災の際にオタクコミュニティがどのような行動をとったかをまとめ考察した論文が、社会情報学分野としてIEEE 関連の国際会議で採用されたからであるが、その時の経験から、危機は今までの積み重ねや経験の棚おろしの時期でもある、というのが身についている。それまでの行動、体験、人脈、学びや知見など、過去の経験の全てを棚おろして乗り切りつつ、チャンスをつかむものであることも忘れてはいけない。